



テクノロジーと法の未来へ

vol.05

iTLの多様性と学部外での活動

iTLは、情報の仕組みや情報に関わる法律を主なスコープとする、非常に裾野の広い学部です。それゆえ、先生方や集まってくる学生にもさまざまなバックグラウンドがあるところが、一般的な学部とは異なっておもしろいと感じています。私自身、入学当初はどちらかといえば情報工学領域への関心が強かったのですが、法律やメディアを含めた幅広い分野を学ぶなかで、より視野が広がったと感じています。また、「データサイエンスや機械学習といった分野への興味も、「プログラミングのための数学」や「統計学」などの講義を通して深まりました。こうした学習を足がかりに、1年次には理工学部データサイエンス・AI



データ分析フェスティバルでの発表の様子

クラスター主催の「データ分析フェスティバル」に出場し、大学生協の購買データの分析に取り組みました。理工学部の先生方や大学院生の方々とお話しする機会にも恵まれ、非常に貴重な経験となりました。加えて、興味のおもむくままにさまざまな学会や勉強会に参加したことも、意義深かったと感じています。2019年度は、スポーツのデータ分析に取り組む人たちが集まる交流会や、情報処理学会、古生物学会などに足を運びました。



学部長賞を受賞した筆者

「生物」と「情報」への関心

私は高校時代、自然科学部に所属し、オサムシの調査や標本作りにいそしんでいました。活動の中で、先生や先輩方から論文の読み方や研究の何たるかについて教わる機会に恵まれたことが、今思えばターニングポイントであったように思います。私自身、もともと活字を読むことも知識を新たに得ることも比較的好きではありましたが、自然科学部における生物分野へのアプローチの経験を通して、学問や研究の営みに対する憧憬の念が増していきました。

他方で、幼少期からパソコンに親しんでいたことや、テレビ番組でもいろいろ研究を目にしたこともあり、情報工学、中でも音響情報処理という領域

「好奇心」から「探究心」へ

津田 敦哉

国際情報学部国際情報学科2年
私立和光高校(東京都)出身

にも興味がありました。そのため、進路には非常に悩んだのですが、「情報」は世の中のさまざまな物事を研究対象にできると考え、さまざまな巡りあわせもあってiTLへ進学し、今に至ります。私は、いわゆる勉強は今も昔もあまり得意な方ではありません。しかし、大学での学びは自分自身の好奇心でいくらでも掘り下げることができ、また、その道のスペシャリストである先生方もそれに応えてくださるので、私にとっては夢のような環境だと感じて



高校時代に取り組んだ透明標本づくり

趣味から研究への昇華

このような学びを通じて、2019年度は趣味の一環として、自分にとって関心のある「生物」と「情報」をかねあわせた「深層学習の技術を用いて鳥の鳴き声から個体識別する手法の開発」という研究テーマを発想し、学部外の研究者の方や高校時代の恩師にも相談しながら計画書をしたためるといった経験もすることができました。困難な課題ではありますが、実現できれば野生動物の行動追跡調査を今よりも簡単にすることが可能になるのではないかと考えています（現在はコロナ禍ということもあり、野外での調査をなかなか行えないため進展がないのですが……）。このように、自分の中の引き出しをさまざまに組み合わせながら融合させられることは、私が思う「情報」という学問の魅力的な点です。

研究に対する意識の変化

一般の新型コロナウイルス感染症の感染拡大に際しては、ソーシャルメディアを中心にさまざまなデマや誤情報も拡がりました。こうした事象を目の当たりにするうちに、窮地に追い込まれた際、論理的に思考し、さらにそれを他

人に伝えるというのがヒトにとっていかに難しいことであるか、身をもって痛感させられました。これまでの私は研究について、自分にとっておもしろければそれで十分だと考えていましたが、この経験を通して「もう少しだけ世の中をマシンなものにできないだろうか」ということを初めて意識するようになりました。現在は、情報技術を用いてヒトが論理的に考え、わかりやすい文章を書くスキルの習得を支援したいと考えています。

具体的には、ヒトが書いた文章の論理構造を機械的にチェックして添削するシステムを実現できないだろうかと模索しているところです。そのような経緯もあり、ゼミの選択（ITLでは2年次前期にゼミが決定し、後期に授業が始まります）にあたっては、長年、法律人工知能を研究しておられ、言語処理や論理への造詣も深い角田篤泰先生に師事することを決めました。

に学部長賞を賜うることができました。私は入学から今に至るまで、ただおもしろそうなことを追いかけていたに過ぎないのですが、いわば「趣味」でしかなかったことを周りの方に一つの「研究」として認めていただけたことは非常にうれしい出来事でした。これからも、さまざまな分野への好奇心を失うことなく、同時に、一つのテーマや分野を深く究めることに注力していきたいと考えています。